

---

## セザンヌと蒸気鉄道

京都造形芸術大学 秋丸 知貴  
AKIMARU Tomoki

---

近代絵画の父ポール・セザンヌは、一体何を描いたのであろうか？

この問題については、現在まで「眼の病気」「純粹視覚」「意味ある形態」「メディウムの本質」など様々な解釈が提出されてきた。本発表は、これらを補完しつつ従来指摘されてこなかった「蒸気鉄道による視覚の変容」という新しい解釈を提出する。

セザンヌ自身が署名し代表作品であると認めた《大きな松のあるサント＝ヴィクトワール山》(c1886)等を詳細に分析するならば、セザンヌの造形的特徴は、「視点の複数化」「対象の歪曲化」「筆致の点描化」「前景の消失化」「画面の平板化」「構図の中心点」「形態の量塊化」「色彩の単純化」として定義することができる。これらの様式的特徴は、W・シヴェルブシュが『鉄道旅行の歴史』(1977)で指摘した、「蒸気鉄道」の「軌道」と「蒸気機関」がもたらす「直進性」「直線性」「規則性」「高速性」によって生じる様々な「視覚の変容」、即ち「パノラマ的視覚」の成立と非常に細かい点までの的確に一致していると指摘することができる。

実際に、19世紀後半における蒸気鉄道の発展とセザンヌの人生はほぼ軌を一にしている。そして、実際にセザンヌと交流のあった同時代の印象派の画家達(マネ、モネ、ルノワール、ピサロ、シスレー、カイユボット、ギョマン、カサット)、さらにその周辺の文学者達(ゴーティエ、ヴェルレーヌ、マラルメ、ユイスマンス)が、「蒸気鉄道」を様々な形で直接的に主題化し、特に幼馴染であるE・ゾラは、『獣人』(1890)を始めとして、作品上でも実生活上でも「蒸気鉄道」に熱烈な関心を示している。尚、A・コルバン『浜辺の誕生』(1988)、R・L・ハーバート『ノルマンディー海岸のモネ』(1994)、M・セール『火そして霧の中の信号、ゾラ』(1975)等が指摘するように、印象派やゾラの主題には「蒸気鉄道」の間接的な影響も指摘することができる。

これに加えて、セザンヌの最初の画商A・ヴォラールには「セザンヌと蒸気鉄道」を結び付ける複数の発言があり、先行研究としても、セザンヌの造形表現を「速度機械による視覚の変容」と結び付けて論じたL・モホリ＝ナギの『ヴィジョン・イン・モーション』(1947)を挙げることができる。何よりもまず、セザンヌ自身が1878年4月14日付のゾラ宛の手紙で、「蒸気鉄道」から眺めたサント＝ヴィクトワール山を「何と美しい主題だろう」と述べていることは注目に値する。

さらに、「感覚の実現」に代表されるセザンヌの芸術理論が、「蒸気鉄道による視覚の変容」の諸特徴と的確に対応していることや、セザンヌ自身が、実際に「切通し」「信号機」「鉄道橋」等の「蒸気鉄道」を主題とする作品を複数描いていることも忘れることはできない。

尚、セザンヌが実際に乗車していた鉄道路線の車窓風景については現地の動画映像を提示する。